



南  
唐

中  
西

中  
西

紫式部詩卷二

中  
西

中  
西

中  
西

中  
西

中  
西

中  
西

中  
西

中  
西

うちをよくつうじがせほふせにおと  
うきの葉の花をたつまつぱうてまかしろくうひだとまちる  
えとこうあるとあくにうゑたてたとあはまうばまくあふえとや  
はけふおふもーききぬへきこらすに

れすのとのちにとみなう。せにねくろきハ。せ中にほふすくでれむ  
しろきとくまなう。うゑたてたとのと。はうゆにをつゆうをゆへ  
し。老と退くゆきいゆく。おとくろきの葉の花をめでたさに。年の老  
なむと忘くことうすとを。けふとは。陶淵明の詩に。酒能祛百慮。  
菊為制頹齡。また。つゆたうまの人のをわするといふ意いりとせむ

あはまはせぬけ。おはよにゆきにゆき。今なとて。こくをうけて

故に京都よりに歸り。今  
阿波抄に附れた所によく

卷之三

ながやあてたまのすこしをうめなかつては。  
余

も。かでな。まくやうて。まきだせをとすくして。あ。めでたさ。と。おも

わがままであるにつけども、まだひづけで、  
うつむくばかりのまゝ、うつむくばかりのまゝ

これより自らの心を以て。なぜやはナニトテをも。あくまではうてゆく。せば

たつもそぞらなり。この格古文に似あり。といふふうすまきへ、ゆきに

もあちやくをしてちきよこのむとをへり。ひらけたまふ。

まことによくおもひてたまへぬ。あてとううへんをはひきたてたと

へゆくよろづ事にどうぞあやし後にておれよへだれぬふ

おまえのまへで見ておれ。おまえがおまえにつけたまへ

くとく。まことに。やもつけにて。人のすまぬをり。おぞましく。お

いそいふとなほ物それ一をんとひらひとな一。つまもがくくをとあけたて  
はうちなきて水きよめれ。おまくとをけにあまひあつやうれ

かちをひきやうてあまといゆしと。おはいとまうとねひよ  
せうは

いそは。ナニドゾシテ。ドウゾシテ。といふにて。歌ふをも。おひひを。お  
（まじめ小まうせうへをなす）。つまよかううハ。佛をにあひけをう。お  
世のねねひにうつゆをひ。あげなで。明きそとまを。つ  
いづねかう。水をき。ほえ。うき。ふのまこにて。ゆく佛をがおひな。  
うきは。おとをなふをせうて。せをる。いたくく風。といふを  
つま。いたく。うとをきこゆれ。さるうに。次の祀。おもおは  
（うきうきとはぬふをう。うたせとはふの處とどむ。うきのとふと  
なげかみてつけてやるせ。いづ。といふ。おひひまく十をな  
しらはよていまう。おもは。水をたんごをして。おひひまく十をな  
るさぬをいふ。おひひまく。おひひまく。おひひまく。水をばうへ傳て。お  
おひひまく。とまう

小少の衣のふたをだ。おとこに。おみれはとくとくせは。づくらひまく。  
えをばま。うとうちさわまでなんと。こーをしたことやうとせたうけ  
んううううにて。たうち。いだく。うとうたこせう。

濃染紙

雲うぐくまもく。うとうとく。おとく。おとく。おとく。

おとく。おとく。おとく。

ことわれまく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。

おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。



おのとは上に引まちくをうめとまよひ。されどうそい文の  
てたれたり。やうすく。むきにあはに。おぶ文のゆゑにしたひてそ  
すられ玉を一服したまて。えうちにまうて。おもや文法うる。次磨半に

三尺もううああれにんがそほにまけ。いとうにほへかなう。と  
まへうきて。わいまとまうほまうのとを。なぐくとくれたと向一とを。  
後にもあて。おこゆとひ。そそこれ遣ひ。はーよをさせては先に。係水。

アヌス。けき一ゆハ。湖月故に。は鷁又作艦。淮南子。龍舟。鷁首。註高誘  
云。鷁水鳥也。畫其象。着船首。以禁水患云々。細々。詩ハ水を  
心に仕する。鷁は風を乗せて。くわさのを。いそ。なと。そ。た  
は。深。高。うつ。うつ。うかと。おもよひ。あく。代序。船小。一。ま。なり。

おまはたつひとと。ま。あうつき。う。ひまほ。一。ふつ。ひに

このり。葉ハ。十月十六日。日本記畧。寛弘五年。十月十六日癸卯。天皇。行

幸中宮御所。上東門。从以弟二皇子。為親王。左大臣以下。於南庭拜  
舞。とそなう。右練杖を回一

うんたじ。おれ。四。食。ハ。一。比。た。ひ。おれ。は。こ。ま。は。ま。れ。の。や。う。に。そ  
う。に。内。竹。の。う。ん。の。よ。く。ゆ。う。に。お。も。く。れ。ば。う。な。と。よ。う。と。そ。う。路  
ふと。き。こ。ゆ

こ。ま。く。一。か。え。の。四。方。ま。う。サ。ミ。と。ハ。詮。本。室。う。こ。ま。く。ハ。傍。り。や。に。ゆ。に。内  
竹。緒。度。は。や。く。清。き。う。と。う。意。を。う。と。い。そ。ね。う。さ。れ。と。ね。う。に。と。あ。る。を。不  
れ。は。こ。れ。り。ま。に。や。ま。の。四。方。ア。替。わ。内。竹。緒。度。の。四。方。に。う。う。て。こ。の。四。方。に

曉に。かねて。あらう。残り。よろこび。に。うらげ。うまと。ほ

このかねておまへが小かね衣と同人にやうふ小を脱だり。肩げりあてよ。少  
ね君とよこせまつをあう。又师え。こは。疊小かね衣とあう。小を小にう  
し繕れをまへ。まのうちよくねるにあうきかね衣とじひそ。よたと  
ころをう。といもくらう。よかく、せすうやまのぬ方にまかしむす。うらけつ  
ふ、髪をとくす

上の衣類を脱ぎて、きぬのをうつすとありますたは日たるをくいのより  
をくといひあくた。たゆには、ブシャウをく。なほくへは、アーデモナイにて、よ  
けつみの旅をくすに、卑ト一へへるをくへ。まく、まく、まく。  
ゆくこようへをく。さてこのをとくすていど、ふれゆけふくく  
た。旅を人ふきみて、おけ出でた。りまふらくをたはと、いたる  
ゆゑこぬをまづきひて、じくまくとこよへと、うちわなすを、うく宵  
うけにや、冷ふ意、まく、まく。とを脱せむ。又かくにかくの旅、  
なほくへきがる。又よへうのを、ふくしつけた。とあるとく。  
これとハ、絶まの繋つ轍をもく。西宮詫の行幸の條に、雅樂寮候

各 遷奏樂。よのとたう。いおもてまつ、要すらへたう。そのあまてひきとてある  
女房よよかゆのあーとをう。あーきづき。衍。派。はやうの下にさり  
を脱ぢるをう。文の下。ほやく。きなまといふをう。

ひこへむくもあく。あをうくいとたそくや。よする見えしは。うよらやうれしうま  
ひむなう。うのじゆくといとくふけふうづかう。なにりとくをう  
たきあらへ。おのほとくわうあに。まやすけをしりとえ、

よし、序裏を階の外にまく。もとより、階より昇りて、序裏  
を昇る事あるまい。なにせナシノアヒテ、手に手に、  
もやうをとつてゐたまう。そいへなにうを活けるとも、とくとも、  
う。まのほとは、ひかれて、おぼれあたぐの文の意、とくに、おち往

あへた。あはなすをよきへ。つゆへこそりうなた。おまへらとくろがね  
へり。内ひえはゆふる二人きり。松あけのとおりにゆす。うゑひ津代  
女将をり

女  
子  
傳  
卷  
之  
二

赤濃裳領巾襦  
たまごのたんへ。れそりとく。あをいろはもきのうへ。ぬすせこの色。ひきくん  
帶 淳線綾  
たはふせんとよひ。やなにせんり。うそきは。きくわゆへ。れおう、これ  
櫨 純  
菊

あすの間。まことに。おもてはやうにひつけり  
まきは下。たまの内侍の下をほへたり。領巾。袴帶。傍やのひ、まに見えた  
り。ふみり。まちがひに。まくらのまのをぬのゆうもとひとあり。そ  
してれども。おどりたゞ。まくらでまゆうなり

代へねた。と、やうにきりけをあんじて、すこしでみた。せん  
くまうるさしけ。あふきよそもきて。これも酒いた。といゆ。ひまは。あうちたん。  
ゆうれいすこによひひのたらほとよせほひゆく。あぬうたりえをとあこだ  
すきも。うくわあうえとあてれぼゆ

あすか、蟲をうけまことに。紅以下、矢内竹  
おさゆを。まじのにそ。左まつ肩竹の裳。鹿衣に同。如とぞ。もや久。ちひ  
うでなく。のみならば。角一けふもとを。庵を。ふうしは。キドクナとい  
ふえも。このも仰りた。身こなし。さゆの。絆の。人。のよう。あさうた。うへ。な  
申ぬ。下。十。多。字。解。うた。うすに。よ。此れ。れ。をと。む。ま。淨  
浦原天皇代。吉野。室に。れ。す。海。に。神女天。源。て。舞。を。み。れ。な。

正。羽風を拂ひ。さすがに見だされぬにて。此の事は。或  
は。今せにも。以ひまへ流と。あまたあれよ。皆ともにたぬとなり。  
されど。とくしく。禮跡を。引ひく。而てにあひ。元。内侍はりば。  
手報やにな。手記のには。手。報や。云。とてな。

をあつき。いつまづ。ひすき。て。ばこ。おもむかたをまよ。いとまづく  
一。ひやね。れぞう。とどき。内侍につなふ

を悉つき。を東府の官人。あつまく。おにいび。まづく。ハ。まづく。めくを  
あまくと。向く。武官の車。ひく。くとく。たまふ。あをひく。又。延

喜近衛式に。九供奉行車。大將以下。少將以上。辛達着摺。辛並着  
摺。辛近。代行騰。近衛。皂綾。青

皂綾。横刀。弓箭。行騰。草鞋。

辛近除行將監以下

府生以上。並着皂

騰着靴

綾。布衫。白布帶。横刀。弓箭。行騰。麻鞋。辛近以蒲脇中代行騰。近衛。皂綾。青  
摺。布衫。白布帶。横刀。弓箭。蒲脇中。麻鞋。云々。とぞな。これ。性良  
家の。ア。を。まづく。と。つづ。腰。えく。そぞう。あや。あう。と。まづく。と。  
つづく。と。まづく。と。つづ。腰。えく。そぞう。あや。あう。と。まづく。と。  
と。れ。こ。そ。と。つづ。と。と。そ。と。は。腰。えく。と。まづく。と。と。れ。えく。と。と。まづく。と。  
え。た。と。と。と。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。  
片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。  
片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。片。綾。を。

づ。風。を。拂。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。

えにす中をとまらせはきゆうそしたくにはまかのあをひかあうふうのう  
きぬにせすよお寝うはき、うだくたてすもよお寝うだくた  
蒲萄

おまえはうそで。おなふをぬぐも。まぶのくちを

「此處も、禁きをゆうへた、止觸のふをひへり

あやゆかねはまぐりわとなくももんのあそき。まくはまくなど  
龍巣  
大海

腰 級  
周 文

卷之三

水のきい大蔵を知た。まほれのきをすく。あまく。浅見。これ

卷之三

すゞしにはあやめうさぎすみすみに白き鳥

1. *Florulae*

は・キ・ヤ・ウ・リ・ン・ナ・ト・ア・ミ・シ・テ

うちけたらおれは。ほなぬだらうちか。うておれを  
はうて。つまひをあ。たてたは。ゆゑのをうへ  
蒙古語。おとが。ヒカニキをうちめ。みのす  
1 蒙古語は蒙古語をうへ。ひきをたへ

まくらの下に。うるさい本にて。よみ終へた頃には。こちでさうふ下に。あくまで。ひまそり。おとづれだけ。といふ。なじてさう乃ちたまへ。着きゆゑを。まこと。或翁の目のまへ。お向ひた。女房とよひ。老翁のけぢりと。残す。ハナシを。まくらの下に。まくらの上に。よみ終へた頃には。こちでさうふ下に。あくまで。ひまそり。おとづれだけ。といふ。なじてさう乃ちたまへ。着きゆゑを。まこと。或翁の目のまへ。お向ひた。女房とよひ。老翁のけぢりと。残す。ハナシを。まくらの下に。まくらの上に。

さてはあくまでさういふが爲めにひつまくあやしめのうちをきく  
とくに見ておもてなすヒコロヒヨウ

さそげサウミテハカニミルトビス、ヒツムシナリ。アソモシナリ。ム  
ハキモ。而キ麻モ掩ヒタ。ミシナリ。ヒツムシノ額ツキトアソモシナリ。ア  
ヤレクハ。奇妙ニナリ。ホノクレニミ。珍木名也。ホノクレバ。アソモ  
キナリ。シタリテモヒハ。シタリラク。ニホム。一ノ木モ。アソモシナリ。モ  
モキナリ。ヒツムシノ腰ツキ。アソモシナリ。ヒツムシノ腰ツキ。アソモシナリ。  
ハモキナリ。モヒツムシノ腰ツキ。アソモシナリ。ヒツムシノ腰ツキ。アソモシナリ。

うふふくうちにすこし見えゆけむ。おまきおまきおまき

まことに。おはなしのひと  
今叶ひた。れどもひのひと

うへのや房、あにふのうへに車、あらへあうとよはうへんじゆづけ。と  
ゆとゆく。内裏比やをとく。そと内裏比や宿をとゆまゆまひをと  
ゆるを。まにうけをやふとく。ふい、もひとう。りゆみのゆうけに。  
こにはかづひてさやふす。

わくわくあつとて。ちくわんたまのふくよかくあげて内行のうて。さすがにそ  
くらむときりひづかふよろへ。天かず

元氣があとあればやがてのむきえのうを、家からうちへは着るのみ、せう衣裳  
きぬのすとさうれようなひ。萬三佐あざれろくそくぬうあやせきな  
まかわらぬ。うきなめにとおじた。うきのうきにて、ぬほに

一とあけたゞ、驚きに、  
やにあつてのうきぬいとす、

度。うつむいたまもうほひてたまへにゆくかくはく。うじたまくらまくら  
ほくよにとへそうちをかくへゆくかく。やくまくわくまくわく

卷之三

れども、常は學ばぬ。うへと、考セテアシム事多矣。下皆同。まへた  
るに、うち此へとアシム事多矣。とぞ、心を省きエヌ事多矣。さう一  
をきな事はよかず。このころに書にこうべと云ふ。今まづしに書く。この  
いそく、表までの事也。

いそゞ、采まひをば

せや此キトヨアにて少ヒのうへれどもあたまをまく。まくはたゞよ  
うへとひきせびひてまく。寧れ表はてこゆにうへいとげすてやしたを  
きこくちづくとげふたもうちあまをかほへる。左近てあうにをうへいと  
り。衣はきじんすけふ。きよや一時へ

ゆゑに、そぞろちにゆまとあるを以て、寧れまひすのす、寧れなしけ  
さういあはてたまきなり。それなへはまにしぐけかといふ、或ひうらに寧れ

君のぬうちあきてひけたるを理たりとまへてゆくを。今  
りけづらうあまくとも。きよやく衣のをみてとおきゆのよひふきて  
まやうにたまひ

く水ゆく流。こづくと。ビタ。ろー。よまア。ねえにさあい。すく。あれら  
賀殿 長慶子  
く太平樂。かくんをもつよ。じともちやうけの。を。あうて。あうて。にあせら  
て。ふのきれの。うちを。ほく。ほく。ゆく。ゆく。ゆに。うえの。まき。ほくみの。ま  
とき。ふ風。ふ。こふく。ゆ。あえて。ゆ。と。まそ。う。

貢殿も長慶もとよこに繋の為なく、はうて音戸へ繋に入音戸  
退出音声といふとゆく。體源秋山など、姿一きといふ繋有りと  
之一とは、夜すれど葉ふるひ、木立れど葉ふるひ、鳥たゞ

とまくもひ小てうやう水あらぢゆうたうきり。池の水をみだらう  
うき。おもひこむきにうへば序あきうたうひきうへうけうん余ぬ  
れ。おのうさむうめうれいほくうきうみえうじうを。今はうさみて已

水に落ちる。水を多くりあやまつて、うちゆき  
たけいきなくとおしゃまくらをうく。せうさむきは、とひ  
きときもくぬをこじあらう。さにまとひて、さむきをひく。さ  
りすう、おとせうとくう。おとく、おとせうとくう。  
おとく、おとせうとくう。

國融院  
ちくせん院辨は古院のれき。傳とて。され度のりまはいどひひくあ

アリコトハシ。ミタカツ。アシキタマ。アシシタマ。アシキタマ。  
ヘウメルモアリ。アリモアリ。アリモアリ。アリモアリ。  
アリモアリ。アリモアリ。アリモアリ。アリモアリ。アリモアリ。  
アリモアリ。アリモアリ。アリモアリ。アリモアリ。アリモアリ。

直院の事。女房ともにソシ酒を。圓融流は六十四代の事す。ゆく  
と。こゝに。まづ。うなづいた。ゆき。いは。まづ。うなづいた。ゆき。  
ワルイト。まづ。ちくせんの令持の。まづ。うなづいた。ゆき。  
まづ。まづ。一け。二。式部の。ひ。うなづいた。ゆき。  
まづ。まづ。一け。二。式部の。ひ。うなづいた。ゆき。  
まづ。まづ。一け。二。式部の。ひ。うなづいた。ゆき。

なうとなく。うちにはいわをうちこぼしてあたとてのふを

れ本がれあせひもあうて。いたそろきに。わきまのれども。うつづく  
えほよ。右のれと。万能らく。お戸にあひてをんきこゆ。とめでまへきこ  
えほよ。左のれのうきをと。万能らく。お戻事と。まうア石にすこて。あう  
ばおほひ。度あそひ。うぐりすを。などし。おほくあうと。おほほへる。  
うそけ。まよひ。うねを。と。えひをむへ。ほほ。うな。と。おう。いと。うう。  
うそけ。まよひ。うねを。と。えひをむへ。ほほ。うな。と。おう。いと。うう。

らとれけ。うそけ。ほほ。うな。と。おう。

坐すにあひて。と。表文の坐のうづく。また。お繋のあひて。まことゆ  
となく。と。絶ぶる。無い。かた。なと。ハ。なにと。なく。あくまき。いこたひの  
りまに。やひと。て。ハ。づくの。は。一。と。よ。お。しげ。ひ。さた

じ。片やれひも。に。宝玉。ま。手。せ。ほ。を。う。せ。り。ま。な。れ。そ。め。ほ。く  
ハ。向。の。ま。ま。を。が。う。に。う。な。く。あ。い。な。く。ハ。辞。人。ア。お。に。寒。一  
て。泣。を。う。ほ。や。お。代。に。あ。ま。る。く。續。日本。後。記。に。出。雲。權。守。正  
四。位。下。文。室。朝。臣。秋。津。卒。云。監。督。非。遠。最。是。其。人。也。論  
武。藝。足。称。驍。將。但在。飲。酒。席。似。非。大。夫。每。至。酒。三。四。杯。必。有  
醉。泣。之。癖。故。也。な。と。口。不。だ。う。う。な。と。お。に。う。く。ま。と。い。と。う。な  
く。お。と。う。と。仰。く。今。う。う。に。手。を。及。て。ぬ。と。お。と。う。ま。し。て。手  
を。底。ほ。う。う。と。れ。ほ。ー。と。そ。に。同。く。う。れ。り。す。の。う。た。ー。け。な。さ  
く。底。ほ。う。う。と。れ。ほ。ー。と。そ。に。同。く。う。れ。り。す。の。う。た。ー。け。な。さ

く。底。ほ。う。う。と。れ。ほ。ー。と。そ。に。同。く。う。れ。り。す。の。う。た。ー。け。な。さ

てよきを以て。まつき。度の御司代ケイシ。さうれり。加賀に。近矣。一。あ  
なれは。奏で。そを以て。

ソセ清ひて。すに。すへと。ときせ清ひて。とある。尾をす。ぬすに。め一  
の下に。作。も。海に。と。経を。かかへ。まつき。海に。宿。任。郎  
と。たまこと。そは。中主。お宮人。と。へ。言。されは。一人。ふ。き。ま。う。に。居。代  
京司。は。道。長。公。の。家人。を。す。ま。う。に。う。に。こ。た。ひ。室。子。清。役。の。方。代。と。に。  
房。序。今。え。う。を。か。階。ハ。信。を。ま。ば。と。な。う。あれ。ハ。き。こ。は。く。ま。て。既。安  
一。て。房。ゆ。今。新。と。葉。内。一。新。く。や。せ。て。せ。ー。め。し。お。を。清。ひ。ー。そ  
あ。だ。く。ー。き。ま。み。け。と。ろ。ひ。小。く。ち。れ。上。ま。ア。い。き。つ。れ。て。ね。ー。ま。う。清  
ふ。房。原。な。う。う。と。こ。う。し。て。ほ。、列。か。と。だ。う。清。そ。う。う。

あ。だ。く。し。ま。の。れ。よ。ろ。こ。い。と。お。に。や。で。る。日本。記。畧。の。文。に。以。第。二。皇  
子。為。親。王。と。あ。る。を。い。ふ。後。で。よ。え。の。日。ま。つ。御。司。川。島。な。と。人。を。藏。さ。れ  
ま。う。う。と。そ。そ。た。う。う。ら。れ。上。ま。ア。ハ。民。ア。上。ま。ア。ハ。道。長。公。の。う。か  
ら。を。房。原。の。人。を。す。房。原。な。う。と。い。不。比。等。ら。男。子。四。人。を。四  
に。こ。け。て。お。家。お。家。式。お。家。お。家。と。名。づ。け。て。三。代。道。長。公。は。房。原。に。代。流  
に。て。お。家。お。家。は。主。領。の。三。家。ハ。同。民。な。う。と。す。こ。う。れ。な。と。い。こ。れ。つ。に  
つ。く。の。人。麻。路。に。

そ。え。お。丈。紫。や。の。傳。既。に。い。因。人。ド。て。齊。代。こ。こ。に。か。清。ル。を。傳。一。こ。れ。に。よ。

齊。信。郎。皇。太。后。宮。公。任。鄉。源。經。頼。實。成。郎。

右未つ聲、氣や氣をまほてこない別處にまく。この聲主の氣のゆゑをも、  
齊竹を公仕へ。二人とも引あてたるにまく。おにまつら、度の氣のゆゑをさり  
まく。か皆はとぞれし、聲をひいたれど、大丈は中丈の様子をへし。まだ  
すりこして聲の傍邊ふ。完成とて行進。寧れ因人とすして、一往進。寧れ、急  
中丈權。亮（亮なるよ）に、三後事なり。はに、之のすけとく、そん丈文、半丈  
持亮少て旁わづて。か皆さる行進。寧れ持とすと、之を經て。完成。二人とて  
、笑ひて。行進またに次ふ。あに、手に、まく。まち声を経て。持亮持  
寧れを。か皆一様にて。前進せば、と見えなく。小、大丈の太、行進へ。天候至つ  
て、そそぎ、腕をうながす。二、三歩、すくまう。舞歩、か皆さるままで、手に行進  
へ。此れうきに、ゆきを落ひて。社をなだ小車へ。ふけぬれ。これと並んで  
、させねひぬ。又のあと、小内のはづれ。あきらめをもぬにまわし。さらや  
えすくへ。えにまくにまく

まやまぐ。帝はそな方にいそぞほくに望む。かといたへ。皆小れ事ふ。よ  
りもかで事まや。往く。もうすか。又のあへたを。朝を。内のみつ  
い。手代ぬ使を。朝事と。されぬにといひ。くふきけと。うぢやに  
えまは。武家。まづく。おとね。もじは。おとね。おとね。おとね。

この後も、東洋の國へ向ひぬにて、つゝてゐる。やまと國を渡る。そ  
して、幸にせひも、せむらゆも、さへと、又うあへたまといひて、まく  
うけ、まき、ぐく。文の國へたどり、をひと、と、書く。かに、も、うそ

いとあくはほ

つはそれきのほととじこれほとまをアマムほくあくはくきちよに  
なれり。ヒツキまう

ところへまかへるよりはひげゆきよもやてあけなほは度うよまわ  
すほひてまでうへるよもやてあほひじふことを



原を載り、せんとくとすと、筆おのれとまへ。そひて  
かぬうをもぬまきと。こうゆう、一もあらゆる所ありて、消ふ  
文例にあざへといふたう。えきこゆの下にて、原をせんと、筆おのれ  
をかく。そとくと、筆おのれと、はやまたまなれ。かくにゆゑをなれ  
送りをかく。おどりにほとくと、あらまくと、かく風をきこへと、かく  
なり。えほ本にまこと、次の段にて、かくと、むだめかほ風をきこへと、かく  
いたく。うたふかく。とやをかく、お音ととせ。こかくと、きくくうや  
まひうへてみだらぬのゆにまへし。かくちけなまほて、上らうへて、下らう  
だけちく。せきいとくと、あくとめほくと、とくとくと、あくと  
はて、あくとくと、あくとくと、あくとくと、あくとくと、あくとくと、あくと  
あくとくと、あくとくと、あくとくと、あくとくと、あくとくと、あくとくと、あくと

のたゞきなとこゑをうらうだ。承ふるゆく月であるが、う  
むとこゝろよしやうれいと、うらうておもひぢめれわはんも、ふとしげな  
らううじゆー。わやうらうノ今世もおれをぬやにあきれたまこと  
ゆふられなにかあきれまゆー。とはまゆに

よのたゞとさり馬・衆兵の教をうけ、筆の跡書はくわゆ。かく一ひととハ  
ナシて、上にかゝれ、みだらすて、口に含むるを以テ。けよ、避サケよしと、  
りのけよ、えをす。下よしと、ひ揚ハタフかう。せめほへとい、そめほへと、係ね、いと  
以下、どうぞれたぬすや歎すたう。きくよしと、おにづく。おにづく。

乃局也。下すはうたをつまむ。而とは、またうたをする局を以て。あ  
そは、後ちにうつてやほきをあらと呼んで。まことひゆうましの下に、  
机うくさだまきれなほとふとソシテをいふてんびし。なにうつてう  
さきゆくもとよきくと。おおぬいとひく。あひれば、ニヤレテゑくく  
するをかく。あきれそあー。一やにも

れひうは、亥月のはひたちれ日。まひ乃人かきなぐのほりてひだら。ひ春の  
あうきぬ。徳にうしたちあひをの景にそ。いとうはてぢう

れひうは、鬼せみて。五十日あくべ。日つとひ。河海抜に五十日。或百日。供  
餅事也。天暦四年八月五日。儲君降誕之後。當吉日。依世体。山供。  
脚餅。え々花き餅甚に。子誕生珍ち。五十日をは。ひうとく。百日をはもう  
えく代わ合あ

曹司

ひ丁れあひたキ。北きとて。まきうちを。れく餅をば。いと。じと。しと。そ  
しらまて。ひととゆきに。なまこて。あたきて。あたきてに。れまねは。まく。す  
ゑく

種くわねく

況

に。に。すて。おほまれたま。おれ入らんのを。しに。に。くわうたれなく。えく。  
そそくれとは。えに。ひゆゑ。い。寧お居。おまく。とく。お房。と。ふく。そと

ゆひなとへた

おほえ 東三條葛家からぬかみて序名詮子一條は室太后宮をうなに 小のはナ  
院お門女辰にて東三條院ヒヤヒレヌリニヤカヤノとソムシテスルトキハトモハタク  
れは、候あけたまよを

さうまのいぬをひは大納言ひんぐによくてよかすゑたうちを記した  
いわさとひうのたれすもぬなどもひくとあまびのくともゆおしよひ  
んやせよひはよひはよひはよひはよひはよひはよひはよひ  
べいわきよひとくつぎつよひだくにかてくまくいえほくどいよへが浦  
めれときゆらはくまくあらへたりまくとこまく。に丁むちにて。  
倫子著  
よくくびとうアキタヒテガラヒテモヤタヒテ。ほしげれはあまは  
じとにゆた。あらうのうへひせぢ。ぢすりれ寝うほくくうせんね  
ふもたげをと。あもしにる。あまひえひそめひそめひそめ。すうせん  
こうちをまひ

さへはまきの。を省みて。手便にひづる。か浦ためのといふに。大をもつて。  
セツ  
モヒモヒ。荒人。矢のめど。ある外れ。今一人。おれ乳ぬる。きゆるとい。禁  
きを越へした。かく。こゝへ。ふこへにて。まゆう。きを。がたけなく。は  
カソレオホイ。モツタイナイ。ヒツヨウ。あましに。の下に。と。一脱する。ヒ給ふ。暮

度。せらひとまかづけ。えもんの事ハ。まへひく。たるのに。れきて。まく。べ  
右大臣顕光内大臣公季

ハーマジ

おちひひ。みすらに後式比餅にて。着丈にあり。持てまつ。きのと。酒肴  
一三の衣にてまつて。大臣と。朝平にて  
あうひつね。こよけよよと。居のいきうち。あうちをたち。とくつまつて。まわらう。  
うらんにてて。すゑまたたり。火炬あ。一光りれんとなれ。に住か  
ねなどとすいよそ。一枝くまと人々はる。

この阿海抜に菴をさみて。荷孫をしき。み菴を入れて木の枝或  
木く。とくなら。折樋。も。菴物をともに。みすらの食線をしませぬ。す  
まうち君。あつ公。ひきみて。天室の序。茶にさくふや。こゝとにて。店に  
代をし。あうち。あつの音。使に就けしなむ。とくに。古事記傳にぞなり。  
えさは。すゑ。だいた。折樋。も。菴物をも。こよの。まや。不に。

たちあう。一や。たきあう。と

うちのだん。不に。も。まかう。きに。あに。よう。ひ。ぬい。せじ  
て。とく。まく。ひ。まつた。ひ。みに。の。ゆ。に。まかう。て。上。まア。た。そ。に。め。さん。と。げ。ん  
一枝く。こ。しめ。つ。ど。あ。い。度。す。そ。し。ま。り。て。こ。を。酒。か。り。持。て。モ。一  
ひん。う。比。つ。ぬ。よ。ま。一。酒。か。り。持。て。

うち。内裏を。この食線を。内裏。比臺盤不。おて。まよ。ひ。き。か。人  
人。か。と。持。え。す。を。ま。ー。ざ。る。を。明。り。よ。ひ。酒。ぬ。ま。る。に。ま。つ。て。こ。よ。い。を。酒。と  
酒。を。ま。つ。と。ま。り。て。よ。と。ま。か。し。か。う。初。ま。に。内。の。た。い。そ。不。に。ゆ。て。ま  
は。ま。に。あ。に。ま。う。酒。ぬ。ま。と。こ。よ。い。酒。を。し。ま。う。ぬ。と。ま。く。う。ど。う。ま。う。

つ。おとこかわう。と寝をひいておひで。おひい。湖月抄にあひとく。在う  
一ひとをある。お忌とお掌をきて。簾をひいて。あひをとよせて。  
アーモドを。とおもく。さのとおれうを。阿海抄にくす。このころ  
お書きしてあまたをなじる。みのりをいせまつた。手は簾のと  
ち。さこへ一つ。おまつまこへ。いはをほひてめにす。おはは。  
くおまにあくほん。まよ。おに。食をほぢう。ひき。おほを  
とおねを。初元までえ。そらのあはとうにて。おのつよ。お  
ておほり。おもをそれば。らをほるに。 あるまにのほ。ま  
やまとにておき。脱なむ

女房おまへおまへおまへなり。じよを。おまは小あうておほる人。

よりへ、まにあけほよ。大納戸。表。草お表。こかね表。文内侍とおほり  
おうおあひてま。たと。東の間にあうておなじ人。おの間お簾  
をあげ。ぬの前にあうておなじ人はぬの前をあうとひ

衣のれど。おうてお手おほら。ひきたち。おれほよ。さなすがだう。つ  
き。うふをあふきをと。たと。おもひのうたをと。おほう。大大  
き。けと。おなじてほひてほひて。おもひうたひて。おもせひ。おもひうを  
し。と。おもひう。

ほこう。ほころ。おうだ。おをひ。ひきなむ。引断を。おなすが。お  
の齡れ。盛りすぎ。おなじを。つづ。おうふ。女房とのう。あひを。お  
お房とお扇を。おおだきの盛ります。おほほほほほほほほほほほ。

不とをうへぬたとす。一語をきいたとよてす。蓑山ハ猩鳥小  
鳥の音をう。みゆみに鳴にねひる。五は。とよあくにあくたり  
三や。あふたのへさや。とくたふか

さや。あふたのへさや。とくたふか

實實鄉

其のつきのあいんうのそらとて。衣太物よみて。衣つぬ。袖くちうせへ  
まうやう。人さうとく。あひのまうせをあそつゝきえ。又たとう。ハ  
なトおひゆて。あうぞとよもひ。いもくさいとあくくま。けふぞ、

れすすへうめし

衣つぬ。袖くちう。あに。お唐うな。このをうかう。とゆる。モお唐う  
れ。衣よ替ひひ。衣つぬ。袖は。う。又たう。と。いを。このをうかう。  
あいて。う。たれ。わふく。人えあえきなと。おひゆて。とく。おう。さし。と。

う。一。と。そ。一。ま。一。時。ハ。だ。う。と。と。ハ。お。ま。ハ。術。を。一。省。ま。と。ぐ  
ま。え。あ。て。文。詞。と。の。は。文。本。義。ハ。た。ま。と。ほ。を。と。く。ん。蓑。の。争。を  
れ。彼。と。う。手。を。と。と。ひ。ゆ。て。と。く。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
此。醉。翁。が。を。あ。を。つ。と。と。を。き。た。ま。れ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
ま。ま。め。く。人。う。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
と。  
と。  
と。

あ。ま。つ。ま。れ。す。く。を。あ。わ。は。お。ち。様。一。と。美。の。ヒ。を。ひ。の。ふ。と。代  
は。す。と。と。ぬ。

おふへ然にて。食を揚て木のち文をひろくうけてとす。すんへ入り  
巡査を。おち降よハ。上戸をくぬまへ。とくくい。とくくくへ。す

東方代ハ。行ひの席にうなづき。巡査乃も。まつてとくへ。

代。行ひの奇にて。うなづき。行へ。

公生卿記

五陽の聲。あまう。あのかなう。若葉。うなづき。とくくひ。ほ民

し。うなづき。人を。行をぬにうなづき。あはれて。れそその。一。行を。よ。めく

あをうこは。アカツコホイ。とくくまじて。うなづき。若葉。うなづき。この

式ア。葉上に。うて。あたまの。うなづき。うそ。この或ア。むきを。うそ

ル。と。河海抄。蓑草子に。巡く。あるを。無一。むの塔に。くすくす。うそ。

そ。一條。辛比。うなづき。うなづき。あれと。ねり。あせ。よやませ。行へ。

ヒウ。行ふ。まし。持れを。ト。よ。れな。まこと。だ。に。めに。うそ。うそ。な

に。式ア。タ。一條。辛の。れ乳。ぬ。う。と。も。が。ほ。つ。か。れ。ハ。う。行。せ。だ。が

あ。て。う。な。づ。き。に。今。う。う。に。若。葉。と。も。の。行。よ。に。つ。う。て。よ。う。に。不。

何。海。抄。に。葉。上。れ。と。う。あ。で。う。れ。そ。な。れ。に。若。或。ア。の。為。と。う。た。え。

若。或。ア。と。う。せ。小。タ。と。ゆ。行。え。を。う。な。れ。ふ。ひ。ア。の。本。一

う。称。ハ。う。げ。ひ。あ。人。を。あ。い。れ。れ。と。この。う。ら。い。う。に。つ。う。て。れ。そ。一

妻。一。く。よ。べ。一。う。う。ほ。民。表。の。あ。入。達。ア。一。今。と。れ。ほ。と。中。に。う。う。

と。ま。く。お。も。ほ。め。一。う。う。の。葉。上。に。ま。ま。人。か。く。若。葉。本。に。これ。君。を。

こ。な。だ。四。行。ト。ま。一。書。う。う。て。う。セ。行。よ。を。う。う。て。ま。ま。に。こ。の。本。の。四。と。等。

う。う。う。ぬ。ま。く。又。こ。の。本。の。う。た。ち。ん。ま。を。う。め。よ。う。つ。が。に。ひ。う。あ。ぬ

行成  
公季公

三住もい。おとこの屋よもじて。こうやくへ。移先のせんをくへ。あにま。衣



法

あーたつらきひーあらハ表う代のちをばうにむすびとさん  
さはくくきひ壁すまちほと。たほーげてまの手面をしは。いとあすかこ  
とまうかく

れきうーうきひへ辭へ係り。くく語。壁すまの後ろ一きほくを  
きよ。ことつる。ま水の後式のもつた。とくもくをハ隠ルだれんを。  
送長公のとくのけを壁すまへすゑハ。通さーとくして。壁に一おき  
壁すまハ。本教ふて。くすいそひの奇。そ。初夕は。ナニシミドウニテと  
ゆきはてつらくの詞を。やらせ。跡キ赤にて。壁すまへ言を。小  
八。信。きき跡キ赤のありに。今一た若文うりまの事代ハ。壁へ入  
とす。ルトモ。ナニシミドウシテ。う壁。やううき。といふ言にて。里を。えひまし  
か。又初夕に。ふたりを。きみのねうと。終不寝い。ねう。この奇。被東。集賀。  
絶に。まう。あれ。まう。のよひを。送長公。おほ壁すま。とく。ハ床。のき便  
にて。送長公。のやう。まつら。とく。壁すま。とく。初夕のあしたつ。和名  
抄。に。唐韻。云。鶴。育零。楊氏抄。云。多豆。今抄。鶴。別名也。と。名て。だ。鶴。と。之。  
奇。此言は。校。と。多豆。を。徑。と。之。鶴。の。齡。乃。ある。多豆。は。ま。な。く。な。く。  
て。こ。が。文。れ。多豆。へ。鶴。の。齡。を。と。う。鶴。と。之。鶴。と。多豆。づく。多豆。鶴  
づく。多豆。に。と。多豆。ほ。う。に。ら。と。多豆。と。多豆。と。多豆。さ。れ。と。之。奇。初夕。多豆。に  
あ。ー。た。つ。の。齡。は。多豆。と。多豆。と。多豆。と。多豆。と。多豆。と。多豆。と。多豆。と。多豆。と。多豆。と。

いそてあーたつお歎くあへうし。と都ハ達ふ事こよれり。次々。たすけよ  
さあなれは。と心をも一は。あくへのきとまほりてゆ。まほうは。ソレホドなり。  
たすけげとの手あなれと。まみせとふきの。がまきの。湯をれそと。ま  
を。ましと。あくのうなふらく。うきてくと。あくへまくと。ゆめしけ  
と。あくぬ不をうだく。いはひたすと。よゆゆいと。あもしに。とくうなう  
といさやに。ゆめしなり。あくぬあをみて。イツソ感ニヌヘテ。オダウリナリ。と  
あく。このゆに。ちうてと。あくへ。おくまちれり。　いとく。く。キ。よ  
えふる。ひとすたなくして。あくし。よいそへう。初元。半に。いとくひ  
うねきろ。うれと。とぞたり

手代よあえあへく。静かくす名れうにをくぬあちになふ。おもひつけう  
けふといふくまで。おやほんを譲りひて。とくがくうさうとまは。おもひつけう  
おきて。おやしきえほんにつけて。おじ事ね乃。これにきくして。揃ふと。  
あえあへくは。アヤカリタうをう。けりま、差まつた。うをくぬい式をう  
うううみうかう。おひつにういゆりまをめてたまきゆはれ。今う  
おひつけらうなう

まつたまきこりやにやづくあづく。我ほめへ進ひてまづかくにあづ  
きわくにあづくむすめかしまさろくたゞまきだちもあく。あれもいありと  
きふてわづひはづくめりうれきとはよだづく。とれめひためり。とれ不ふ  
れをうえほふとあらゆきれぬひづあえれなうとすゆ。まることいなけれ

はさみをちばへぬよ。あてたぐのふとあきそほ

うはすにてゆきたる。これ一めにやいかくのうへのとなく。つ

あつれりへらへらと結びこなす。我はあくまでも文

をうつほぬき。宴にもあり。又景光物。衣冠に大父を祀る。

と見えたり。あらうは、才しがとつほしの詞なり。もとは、中主がこれにて、倫子

乃はまことに、ひよひよと、送長ちやうじゆくをやれとの様子を見て、笑ひ

猪木をされしあうとあして、まことに、やまとての猪木も又

たまへる。うれゆはひまくせむとぞ。但し今より美男が家不、ゆ

にすくひよちてあきつめてひらたう。こづねきは。カクべつを。さうと。然

いて多く。これされ碎まつて。なまづれても。おもむりと。こゝれをもつて。

はて。まづうそをうなげしと。うきにゆく。わざわざおもて。やいだ。

となればとあくをさへ  
黒ひるがり。おもひひそ  
うふきとあら。

まことにあれどよひはむけにまへぬとなす。とひきたり。まわましま

ふ、おこひな

はまくらのまへにあらわす。まくらのまへにあらわす。まくらのまへにあらわす。

たるはあさまゆ

えにて、遂長ら承戯主をなす。之にあらずてあへてはならぬ。

うせにそとハ倫子はあをへて居をほんをまことに。娘は浅さん  
とてゆえられたまへたれ八丁比内を。あくせほんをまことに。ゆえ  
たまへとおほんとまく。これよりれたまへな。ちめへはブレイナ。ブ  
サホウナとくとく。やのま。すじよの親乃クーラーにすくて。ゆえ  
なとにもたせはまよたれは。親ゆゑに。わくとけもとな。こくわくとこく  
も。オソレオホイをとようとこくにて。声えれどやむとなくをうり。へふや  
今よと仰。きて上に。れいわ。霜月のつぶられ日。とぬらうこれにて。れ  
すれどもうアガムを

まきあをこのひづりとめにし工事無なり。そこでまたもれづくと、京  
元わち相模にねむ合せ。このとおうは考とよとよとよとよても  
人ふふまうきてつるな。されど考のつるつるは。ほの人のと  
ゆへ。又そにそたかまくの妻へ。ねの爲業にそた  
なにのこよちうつゆ。うるうちいきせぬ。と云ふえはん。まくら  
うじやうよかですみなし。よまかう。挂ひて。ゆきりをまくら。よかう  
ふは。とせまくらを。やうとせまくら。また。よかくあにもうひまくらひて。ま

なにのと送長安をやまにやまく詞をうづめなし入るよと曰く。林草子  
にモアシ。えつてはいさうへゆうとす。おうへ、おなへ、おなへ、おなへに  
やうへ、だす。とくせきす。おまかせほんせきす。もだくゆふき。所  
もだくゆ、はがきを。お房とうちもういてうらみたまひたまへりれき  
をうきて、うらみたまへりうといして、うらみをみすもなれど、うらみす  
まかとす。おだれはせんきかくうへ。といふと、いそへ。され  
とせりすがに、まとうや。おちたまゆうけす。みなむは。せつかん  
スルか。こもぢまや。すによ  
しげすにおうへ。おだれとくにやりて、うへたまを。おにあはは。や  
もだくゆ。おなへをきいて。おなへがりんのまに。まく持ひてけり。  
まく持ひてけり。まく持ひてけり。

つほゆよへぐれをたゞ係り。とくにやうて、城里亭へなまへ。ひまに  
ま、やまにひまにあああひたふを。やまはソットなづ。だきゆゆで、  
道長はれす。あざわ。あを搜し索むよきいふ。こよこうれ事にあた  
は。まねるまなう。桑葉に求食とけり。やうもあら。内侍管處。妍よなり。  
おにアマム。アマム。ま、アマム。アマム。アマム。アマム。  
なじて、アマム。アマム。アマム。アマム。アマム。アマム。  
アマム。アマム。アマム。アマム。アマム。アマム。アマム。  
お詫び。アマム。アマム。アマム。アマム。アマム。アマム。  
お詫び。アマム。アマム。アマム。アマム。アマム。アマム。  
お詫び。アマム。アマム。アマム。アマム。アマム。アマム。

はねたす。あふまにちよびれす。四十才本にゆくとさまで。あらう。あらう。  
うてたゞやうにめぐら。うちゑえほづ。ともぞうてこし。今いとをなほ見の。  
おどろくを。カタルとぬるを。うき。うき。うき。うき。うき。うき。  
とはまな。うち、内裏にて帝をやまひ

は葉に池に水をよどむ。日ごとにほんぢをうなづかせる。かくのち  
うなづかせる。うなづかせる。あひあひ。いにをうううんと口にあひま  
うすまほと二日、ううあひてと。舌をふくらむだり  
いせきをぬがえ内裏にす。舌をうなづかれる。とおもひれり  
こたおこた。舌をうなづかんと口にの下にかゝてと。舌をい  
れてすうへ。あひあひ。うきめかず。ほそてない。我里亭。かう。二十九

うりあつて一そんべく言ふ小舟と船ふほといひて載せおへ二  
月ばかりあつて。あやにふとふをまつ。一そんとソラのあやにふあざり。  
重いふとふはフルホトクイタラフレリとよまなす。松つる爲繁にたどろきあ  
りだらけの聲は大後にえ方或アタヒアホコ。あけの岩にてなまくころ。  
えうとの山庚申をさせほふにふれどアヤモカアツシマナ。九条處さ  
うそをまいて。ぐちまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
らぬ小舟。あーた。ほとまて。まぬなよらひといくとねむいヤなに九条  
處。こうひひすくあくつまくあつん。とねほせまくも傳に。せまくまく水道  
さきを。そことねにくは。まく六ぞことて。うなをせほひげにだ一とにい  
ても。みうあうとあう人。きをえうべて。えんくまで。やーほひげにまく

うそいふとれほんだけあひとゆると。向へ御船をす。大鏡を廻もいて  
きだはよかだへとふひてきだりといふをなす。檣下に手をねらへて。まく  
一せぬそなまをへみぐれまで残すと。今どの度つ。よもよもす。

只そあをなまはやまむるのにあらわすむきに林室亭はあらわす  
ひ原へおせうじは、サクサトアレ、いはすおぬをへなういおちひ

れあるをす。あす。きをとく。きをとく。と。経をいれておほへ。ま  
ちうるを。雪を。また。雪を。あす。さく。た。四季が。アラシ。あす。  
文章に。うる。ほを。ふと。春秋に。ゆで。うる。に。たつ。えむこ。  
けり。そて。寒を。雪を。そて。えに。雪を。うき。月を。新を。おひで。ひだり。  
こめて。ぬり。かす。けり。と。う。ハ。時を。くる。と。もに。はー。と。きう।  
よ。あ。水を。ふそに。と。う。は。こつ。う。れ。な。ひ。あ。流を。まへ。し。

歌局次に。いゆ

いはや。いはに。と。う。ゆ。う。名。は。ほ。接。は。や。う。こ。な。に。お。う。る。う。お。  
う。な。と。に。つ。け。う。ち。う。ア。ム。人。は。う。い。の。う。は。あ。そ。れ。に。う。う。い。す。  
一。ま。ヒ。ほ。ま。た。う。と。ま。を。た。ま。と。と。ひ。げ。を。び。れ。を。ま。く。に。ま。  
う。ら。い。接。あ。と。こ。づ。く。を。は。ま。さ。め。せ。に。あ。流。き。人。う。に。と。そ。た。ま。そ。に。ま。  
う。は。一。あ。た。り。て。そ。う。は。ま。一。と。お。う。ま。は。う。は。う。は。う。た。マ。ア。を。お。  
ま。け。こ。ち。う。と。れ。く。な。い。ま。う。お。う。さ。れ。

いはに。や。いはに。そ。へ。う。く。ん。ぐ。と。り。ま。を。あ。や。あ。む。ん。ま。う。や。う。く。ま。う。ハ。ん。ほ  
お。く。や。ふ。む。せ。き。う。み。す。た。な。う。ま。を。あ。う。う。い。ん。ま。そ。に。ほ。て。う。お。め。経。へ。  
う。れ。う。う。文。を。た。れ。か。と。う。や。う。す。風。こ。そ。一。ま。と。ほ。ま。う。と。ハ。一。ま。う。  
人。ま。ま。ま。人。を。ひ。へ。あ。へ。う。は。つ。キ。ヨ。ク。モ。テ。ナ。ス。な。う。お。ま。う。と。は。サ。ト。リ。リ  
ツ。モ。ナ。イ。コ。ト。ほ。す。れ。ま。ま。た。ね。う。う。を。う。一。せ。に。あ。ま。き。ま。い。つ。う。れ  
う。一。を。卑。下。し。そ。ふ。風。お。て。ば。う。た。マ。一。係。れ。う。もう。一。材。ふ。に。う。う。一



ひとづかひて。おれはむくあわへてあれにさへくまうす。  
こゑあつらう。ゆきとて。ゆきとてゆきをよむゆきによむゆきなれとまへてこゑ  
ゆきのうちゆきをよむゆきとだしてそたうとやく。れくせんじよゆき  
とゆき。うたまくとけふとせたまはれかとうとまく  
ふにくさんとおひた人はねほきゆきは文やらすんた。たまう  
めはいきとれ。我ゆきうちあるゆきをも。ふくわくとくんとま  
りにて。れとあゆをえれ。やなゆとをげまとおのづき。あゆくわくゆく  
かずきゆきにたうにたりとと。おひめゆき。おひめゆき。おひめゆき  
く。またおゆきをよむとあゆせにまがおひめゆきにて  
も。うちゆき。おあれあけ

ふにくうんきんば。おうとうに。うおな人を。たまは。ハツト  
な素手。今、重長それぞ。やまとをほどのを傳へ。うちもすを。  
たまにて、とひそむ。さて、ふにくうんきんば。人を。らばうちれ。集一を。あを  
とくら文は。ハツトーた。被ふにて。ハモ文や。ちくさんとう。はるへ。かみ  
れば。れづく。消息を。とく紀き。そ。おせぬと。あつと。よき。おもて。見  
半たゆと。まくを。ゆく。係ゆく。いそとう。タウシテ。た。うちあ。、奥あ  
にて。被ふ。意ゆく。をと。あくと。いそとう。いれ。もう。うんと。あく。され  
そ。ナトイフワケナシニ。と。よほと。の。ゆく。や。幸。ゆと。きは。や。に。や。と  
ゆく。に。え。あく。おつ。あ。ゆく。あ。ゆく。と。ゆく。と。ゆく。と。ゆく。と。ゆく。

かうすみがんでは我を殺にてかくらふとおもひてたまへ  
うむすむとては思はぬ。乃許にあひすむにてまゆとてまゆくともせ  
つをかとがれ。男と女を坐すやうなれど種々にもある所。まことに  
坐りたるひぐれどそれもあつてうなぎまた人づちにもなし。まゆをひ  
あひ人をうそぬをうなぎする。まゆたまゆにまゆてうなぎ。今まゆつ  
うにうなぎつづいてあひ人をうなぎ。あれ我をいかにれゆくへあきがまゆと  
ひつをあらわゆてうなぎ。うなぎ。思當にてあひ。ヨセツナス一てもうをい  
ふ。あひだうなぎをうなぎにあひらひ。とくらうなぎ。あひぬせい。うなぎせ  
ひのうなぎ。あひてうなぎ。年にはまちうねく。前村屋にてはくとくうなぎ。  
上原山にやいはてうなぎ。おまきせひ。おまきかみのうなぎ。  
おひはうなぎ。おひはうなぎ。おひはうなぎ。後。軍にあひてうなぎ。  
まに。おまきゆもあひて。あひをうけたまゆに  
たえまゆにうなぎたひ。おひはうなぎ。おひはうなぎ。おひはうなぎ。  
おひはうなぎ。おひはうなぎ。おひはうなぎ。おひはうなぎ。

おひゆでぬれたり。吹ふるをたまは候ほ。手にあまきのうをす。  
また。うなぎをあさるとて。あさふりけつてにも  
えさくにうちだひすこーとて、かくしておとく。こはやにあせひからく。  
もうそれのうさむひをうなぐ。すこーなつづくねく。  
うなぐたこや

えさく。うなぎをあれうたう。だふーとてたにあらん。さて。清車かとせひへ。す  
こーもえい、すこーたくとて。秋のむとあら、うなぎを人をなす。こはやにまは。  
ハドベトクニツニあをせひらきよ人をうす。あくまで、うなぎをうなぐ。ま  
にあらねとおふーと。あくまで、うなぎをうなぐ。ま。えさくにうち

。うなぎをうなぐ。ま。えさくにうち

うなる人のを。これこうは。もううまたく。あもうちきやと。學にして。あ  
ははーふを。あを傳へあもんを。ふふくうんなど。もじんふうへ  
こくは。はうを。もううと。ふう。おもれーとく

大納言無れ。もろくは。まに。いとらうふー様ひつ。おううー様ひー  
まもいりこひー様ひ。をほらにて。ういぬふう

越生亭にて。中庭の五葉松の下を。おひひーたす。おほらに。うと。お  
にうーふを。はいきたゞ。だくへ。をく。ううのきす。にも。うもあやー<sup>32</sup>  
ス。おもいをなして。ひくうた。うつう。をと。うて。佛の邊に。ふよく  
おひひーた。ふに。もうく。中庭の五葉松の。ひーだ。おほせよ。景鏡に  
した。うめ。枝ふらなとく

う続々セー水の。うれし。ひーく。うき。け。小さな。おうく。ぬ  
初夕。戎里亭を。ぬ。中庭は。あひく。命はく。守りて。と。え。以。ま  
を。深するやう。うちに。たと。い。ほ。二。の水。う。は。初夕の。緑。ひ。う。ゆ  
べ。すれ。う。そ。は。ヒエ。う。三。れ。き。や。ま。ば。は。方に。ま。は。て。ゆ。う。お。の  
ゆ。ゆ。れ。う。戎里亭。ひ。こ。の。ひ。鴨。乃。上。毛。だ。ま。ゆ。う。に。れ。う。に。  
さ。ゆ。う。う。と。の。ゆ。く。次。ふ。玉。と。あ。れ。は。ぬ。あ。の。ゆ。う。を。お。ー。く。お。ひ。ひ。で  
た。ゆ。に。こ。う。う。う。て。大納言。君。に。つ。そ。う。を。た。

五ー

うち。う。ふ。よ。う。だ。ご。ろ。だ。き。ま。み。に。そ。つ。ひ。を。一。お。ら。は。お。ひ。う。き  
か。お。高。を。ほ。い。と。や。う。き。を。ま。ま。か。と。お。ほ。ん。く。う。と。う。ゆ

うちまみハ鶯を一ト乃上毛にむく裏代ヒタチ。朝にもるまリム。吉代す  
にえ。え國と村ほ一ニ。うひ或アセ里草すに退むるほとす。友達の本を  
タタキ。つう一ハ或アトモアマーヒタチ。鶯ハ或アヘナリ。さて  
上毛の素をうち拂ふ。夜を代代寝覚に。ふくらあマーヒタチ。君  
をこひしとおふとをう。寝あキヒタチ。おはら寝くをう。文乃、紀  
原キヒタチをうとをう。多良也。十分ナルナリ。モニサキ。ニテトモ。彰勅  
撰集に入リ

雪をふらんて。をう一モ。雪をなまかん。くにくあせ候ふ。と  
今モ此經アリ

ひえーて。半乃の現りて。うき書かれて。うき押一モ。或ア代  
たがう。あれ。大崩え。天の五ト。因めをう一

とおう人代ひさす。おに。まうとうめしたひなれは。ことほくに。山  
か。と。酒かん。あまくと。うと。か。ほと。山かん。うと。山。そ。に  
た。まは。た。ま。し。か。と。さ。ま。そ。酒。ま。と。こと。か。し。は。う。た。一。け。ま。と。酒  
か。ぬ

消息とい。文をと。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。  
竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。竹を。  
んとは。まう。繁。或ア代ひ。一。詞を。の。経。ひ。と。せ。楚。し。も。そ。く。云。に。て  
ま。と。

は。或アラムに。四たまふ小車を。さくに作。ととす。ハラシケ。サマ  
て。馬小屋を。モツ。モツ。モツ。モツ。モツ。モツ。モツ。モツ。モツ。モツ。  
タリ。上。下。風。今。車。に。初。代。格。を。だ。に。う。シ。物。ハ。ズ。テ。代。格。に。モ。タ。ル。ハ。ズ。  
タリ。上。下。風。今。車。に。初。代。格。を。だ。に。う。シ。物。ハ。ズ。テ。代。格。に。モ。タ。ル。ハ。ズ。  
タリ。上。下。風。今。車。に。初。代。格。を。だ。に。う。シ。物。ハ。ズ。テ。代。格。に。モ。タ。ル。ハ。ズ。  
タリ。上。下。風。今。車。に。初。代。格。を。だ。に。う。シ。物。ハ。ズ。テ。代。格。に。モ。タ。ル。ハ。ズ。

タリ。上。下。風。今。車。に。初。代。格。を。だ。に。う。シ。物。ハ。ズ。テ。代。格。に。モ。タ。ル。ハ。ズ。

タリ。上。下。風。今。車。に。初。代。格。を。だ。に。う。シ。物。ハ。ズ。テ。代。格。に。モ。タ。ル。ハ。ズ。

タリ。上。下。風。今。車。に。初。代。格。を。だ。に。う。シ。物。ハ。ズ。テ。代。格。に。モ。タ。ル。ハ。ズ。

ナニ。内。裏。に。の。セ。行。よ。ク。日本記畧。十一月十七日甲戌。中宮。入御内  
裏。本宮。設饗。饌。屯食。と。モ。タ。ナ。

ミ。ナ。ウ。ミ。ア。ケ。ツ。カ。タ。ル。人。サ。ヨ。人。楚。の。ほ。う。に。モ。ア。ス。モ。タ。ヒ。モ。ヤ。ル。ヒ。ン。ル。タ。モ。

ヒ。ク。レ。代。ヒ。サ。ー。に。う。ち。ル。女。房。十。よ。人。ミ。ナ。ム。の。ヒ。サ。ー。代。ツ。ハ。ト。ヘ。タ。ー。や。リ  
ホ。の。ほ。う。ト。ア。ル。ト。禮。を。ハ。レ。ト。あ。序。こ。ナ。イ。ト。モ。ス。ト。ヒ。言。を。ハ。ー。ト。  
ち。テ。女。房。い。き。ハ。内。裏。女。房。う。レ。出。途。へ。れ。た。を。に。モ。集。小。を。ハ。ー。  
ハ。ー。に。モ。ア。ゼ。シ。ハ。

中。あ。れ。れ。輿。に。め。と。ハ。ケ。ト。ラ。ウ。ト。エ。ト。モ。シ。ハ。タ。ラ。ウ。ト。信。送。の。宣。令。モ。ト。ト  
モ。シ。ハ。ト。信。送。の。宣。令。モ。ト。ト。モ。シ。ハ。ト。信。送。の。宣。令。モ。ト。ト。モ。シ。ハ。ト。信。送。の。宣。令。モ。ト。ト。

い。ヒ。ク。レ。代。ヒ。サ。ー。に。よ。く。ハ。シ。浦。の。め。代。ヒ。モ。ミ。シ。ト。モ。ア。レ。ト。  
倫。子。ト。若。主。ト。乳。母。の。お。浦。ト。三。人。あ。毛。代。序。車。モ。ト。

大。納。て。穿。お。表。こ。う。手。つ。く。に

これ。二。人。金。つ。く。代。車。モ。ト。

うるわしくあにこかねえ、内竹

蒙古人

つまにはゆきやねとばかりなをこちく人ヒセリヤリヒタマヘアラサモ  
カシトケレヒツヒトスルアガクアガクセキテモテモイハリシ

これにて馬やおと・アトモ・ヨウミ人とは・アト・い・もつあ  
ム・ヨ・ヌ・ナ・ヒ・文  
品よに・早木・木に・す・エ・方・カ・モ・シ・ル・モ・テ・モ・ツ・  
ル・モ・ツ・ル・モ・ツ・ル・モ・ツ・

うなづいてみんとおひこさしとあらわせばと仰ぐ。ナ  
ハシチヤクモノを立ちまくとよいへゆる。とくにはモツタイラニキをう。されば

この馬、中野をもろき人とよばはんをて、城守あらへあらうたるす。  
まやとくしよふを、又おほにこれ或アハシム次乃車をもにまかへま

ちゆをきしをみて、うく風中おと同車一たをもくしてひくやに  
まきこゆしよ。次小一そよとあて、ハなびりまでとあれ、わさにそあ。  
うかあうきは、せうゆらひをくふむつうは、おむつうとあにあ  
いたす

よのきやれは、君。お内侍。次小左衛門の女也。よめさん。さきふとぼては。  
だくまく。つまくは。まのひにそりつけ

と。之に、實名考賞廢典屬等ちをもへてこりと赤内行と回車をも。次に  
左爲内行以下三人同車をも。さてこゝまでいまて、小室の主と呼べり、ぬ如序よな  
れ。車代次才やとくにまじめにまじめにあらわす。これにて次くはは次才も  
をくふにまじめたまを。まへのハ、つとまじめをもあらわす。　まへ

心事のうけり。と

月代くあすに小ひよーせよとれわひつ。おーをせうをう。うほ中ね、  
を。うにたてたは。ゆくようにたてた。うかくよ。あひだ。せうへうを思ふ人。  
もうへとおひへら。

おとせ裏にゆき落すて車うなうて局までうちてあゆもほとまう。  
みーれどや。おれどもまきて。うれしくふれんとく。みーのまよれ  
くまく。おとせをうい。意もて歩むうほう。なくーそ。いりうきれに  
つうくふ無因をうき。に。馬すねびく老くもんをに。うー  
マにうちてゆくをうれすにや。まくくも。せうへうをせうへうを  
あゆのとひへらして。まくくも

ほおとくのくちにへて。ふしたまは。こかね君とれうて。おほくあうこ  
のうじとく。うくひつ。すくたるおとれーやり。あうあとれ。まくく  
い。いとうに火をうき。おとせに。まくくたをきをいふに  
ほおとくの花宴。まに。おとせ。河海林に。からうせえに。あう戸をく。  
う。おののに。おの小様。小禁中。まくくとあういたう。おほくまき。  
は。おまの出あす。おとせをくまくとあういたう。おほくまき。  
う。ソレテモ。やつりとおまき。まくく。おまの儀様をうに。おまくまきに。  
まくく。すくたる。まくく。おまくまき。おまくまきにて。あめたる。厚く肥たる  
。おほく入れて。おまくまき。おまくまき。おまくまき。おまくまき。  
いたをさとまき。あに。おまくまき。おまくまき。おまくまき。おまくまき。

成卿 源経房  
信  
わが室へん室お中わきんの事わまとづきくにらまきつてまくふ

源經房卿公信

乙  
卷之九

すくなく。おもひてなまくよとねえ。やみをよめよとへ

仕事寧めてしも実成ひまつて。やまとはカヘウテメイワクニヒツシミ  
をうねりをの下に、くぐるがよきひだりには、と徑を入れてある。

1

いとあしたふすうせんがくひそなまく。おとすみて竹たまとか  
ひつ。あたみのちんじゆきく

陣  
ん  
じ  
う

あり／今に式アサシスミトアリナハアサハヤウトソスミヒテ明神  
セリム・モウレツレんハ・シラクミミタケニタマツリ・シトモス

をうかがひし。コトナサ、ウニタリ。陣、陣屋をうづもとのにそぞら、  
にて、これ今にあくまでもをあもろうしくおどきをまへ。 おとすれい、  
やつて、ゆく。

れのうちからとひまくもたてもうたは・といひたるに  
らそは竹

はあてを先にうけてから、おまえの通りにまでしておまえ  
はきつてあるやうで。よくわからぬ。なにそくはドレホドリといふ言に  
て、人間をさむれてやう。されどまたこそおまえと、そくともあん。  
とくにおまえがゆをうむ。ちと人ひと、今里にうる人をりよへんをものも。づけて  
おまえをうむ。おひたゞれい。おまえをうる人おまえうる人おまえうる人おまえ

くまをす。城身にまとひて、家臣にうをへて、くもをぬむとす。  
たまは、城の人に歸りて、けむと、やにいわに、城も、もとらうたまつ  
りて、まかをあしに、きよをえそ。今、かわをそそぐ。もかわが、まの  
うちあるぬあきゆをどひゆ。次からひくをぬ  
大きらせばあくた。こがわ、君せよとありてにきうけぞ。らをうへとせひ  
しまか達てをえびた。ちふくと、とくまて、人乃ほとくいへ  
いのこらへくたしゆつをまく

たまのせのあらわす。とてかく人  
もおれまいのうむなこをとこかがわるの。いかくきてあるやうで。せつ  
ゆきのきたのをかわると。えしり  
りとよきもあてはまん。ああのひよじ。

をもぞく。父君は、世人にういき考へにされば、とぞ、あつてヒツト、のう  
のまやかしに、おほびく。あらん。或も、心むきて、おのづこ  
よみがれ、おもひをかねて、おもひ。又れに、ままたぐ、人をもくろひ、おじきを  
のぞみたる。

とへばれこすりやけさせこあふに従ひてくうちとくともせしと  
し。えすんとこせす  
この筋筋やはやくま内素にてくをほじてやうて道長公らう。多くはるく  
りぬをくへ。とほよにまきかみをほじしげれにけさせまくらん。とへく  
まといは繫れきむうちの御度とよどく神々あくまうすなきとすくした

てそぞいとすわいたつまはよろきりそくほくすれをとも古今  
行成テ時大弁宰相

行成于時大參掌相

トホトホとあわせ  
たるく。ひきかへてみんをあわせ。まぢ

志摩の如きと日本一の二種の文を白い紙にて送り乍ら草子に附せ

迷抄ハ勅撰ヲ拾ミ集ヒ、書カ多シ。古外風祥抄ニ大約シ云ハ記ム。拾ミ集ヒ  
を抄リて、拾ミ抄ト爲フ。而ハ此ニ小シをヘ。拾ミぶト、即ム三集のことナ。  
未シ之ノを、又ハ以テ告クたル。今ハ又ハ冊ヲ、夜ハ轉ハ法ハ手ヲ。傍シ  
手に又ハ行ハ成ル。紫光苑カ也シ。且シ此ノ大納キ、とモ之ヲ、悉ク今ハ  
也シ。而ハ次ハ足タた、近ハ登タ。又ハ少シ次ハ、當ハのまウニ、

まことに。小豆味につくた。一束の草子に多く。にぐらんをあさつて。  
まと。坐ねて。まつて。おや。草子のス味に。ある。この二ノ小豆をほ  
りと。こなへ。おまかせ。おまかせのは。敷き方。下こす。

能宣  
元補

韓祖代叔考之。能宣、大中、長元、浦、清原氏也。之後撰集之。

梨壺れも人乃中にて向うの人にまく。やへいまのとハ左衛門、永祚  
二年、能宣、正暦三年に卒す。小刀れもこれにていしのみへと云う。いよ  
此はこのころ乃ずうきみよれぞ

えんへんとらうほのふと。うこたは。まみにて。水をだまさらうまで。  
うそほくえーらぬよまとーなまで。ほすいあめ。うすあとを  
くるむを。ソレハリソレニテオイテと。よきて。こくくう書たら。だれに  
それとくまうを。これん。この今まくぬ銀の人。うなにて。  
しれたぬ。じくぬを。ましまちう。づまにゆつうせ。ほくへ。水  
に。せきを。ほく。つづく。おのの用に。あつを。信下に。番と。した。ハ。勝  
負を。と。せきを。ほく。のまく。いつ。小手と。あゆへ。そーらぬ。もれ  
は。ニナイショウノ物に。一を。まを。ほく。ばの。人。れぞーらぬ。めに。う。い  
は。う。う。草。よ。よ。う。あ。う。う。お。お。ほく。の。そ。れ。こ。と。ゆ。

